



文書部
蔵書
201
12
2

201
12
2

忠老物語

三河之物語

二

まづこの事せんと思つ藤野の地所なり
藤野一山の地所なりといふは為人教を授け
山一山かゝる事ありと云ふ事此れと事
七つあり

一 何人地所なり何所なりと物力尋常に入
後と云ふもの之夫利の通れ付楊屋十部計九二五
又通れ地所なりと云ふは十部計九二五功
あり何所なりと云ふは十部計九二五功
此一領を合するは十部計九二五功と云
此一領を合するは十部計九二五功と云

これ物も此と云ふは此れは此と云ふは此と云
天宮と云ふは此の利根と云ふは此と云ふは此
一いり此の地所なりと云ふは此と云ふは此
今この地所の事なりと云ふは此と云ふは此
しるべきことありと云ふは此と云ふは此
と云ふは此と云ふは此と云ふは此と云ふは此
花の事なりと云ふは此と云ふは此と云ふは此
此の事なりと云ふは此と云ふは此と云ふは此
我を授けし事なりと云ふは此と云ふは此と云
せ、此の事なりと云ふは此と云ふは此と云ふは此

を海に投じ

一海馬海に投じ又其處を以て三持名馬の如かり
飯を乞ふまゝにさうしてはまゝに

一獲りて馬を多獲りて其時先途を斷りて馬を多
獲りて其を以て其時を以て其時を以て其時を以て

一獲りて其を以て其時を以て其時を以て其時を以て
其時を以て其時を以て其時を以て其時を以て

一獲りて其を以て其時を以て其時を以て其時を以て
其時を以て其時を以て其時を以て其時を以て

と云ふ時其時其時其時其時其時其時其時其時其時

一此の世に及ぶの時其時其時其時其時其時其時其時

一海馬海に投じ又其處を以て三持名馬の如かり

是れ其の由同人語りし由なり

一初めの世に及ぶの時其時其時其時其時其時其時其時

一所詮四部書に名ありて其時其時其時其時其時其時其時

よその二國の海に投じ其時其時其時其時其時其時其時

一古より其時其時其時其時其時其時其時其時其時

極多なり其時其時其時其時其時其時其時其時其時

四部書に及ぶの時其時其時其時其時其時其時其時其時

其時其時其時其時其時其時其時其時其時其時其時

只をまははりしるふとて春の風なり

一 切夫の胸當りをさうしてたゞと申す所の如く脱ぐ
試みはさき切ると流るるも

一 七節を過越せしむる人をして此の如くしてしるは

事なくいふ事なりとて及相もいふは流るる如く

たうのうとて言はれははる流るる如く

も他はさき切るとたうりて身なりとて言はれ

如くして及相もさき切ると七節なりとて及相も

はと相もさき切ると相もさき切ると我もさき切

と相もさき切ると相もさき切ると我もさき切ると

一 七節を過越せしむる人をして此の如くしてしるは
事なくいふ事なりとて及相もいふは流るる如く
たうのうとて言はれははる流るる如く
も他はさき切るとたうりて身なりとて言はれ
如くして及相もさき切ると七節なりとて及相も
はと相もさき切ると相もさき切ると我もさき切
と相もさき切ると相もさき切ると我もさき切ると

一 山本道平初稿は流るる如くは相もさき切ると
事なくいふ事なりとて及相もいふは流るる如く
たうのうとて言はれははる流るる如く
も他はさき切るとたうりて身なりとて言はれ
如くして及相もさき切ると七節なりとて及相も
はと相もさき切ると相もさき切ると我もさき切
と相もさき切ると相もさき切ると我もさき切ると

一 権左衛門初稿は流るる如くは相もさき切ると
事なくいふ事なりとて及相もいふは流るる如く
たうのうとて言はれははる流るる如く
も他はさき切るとたうりて身なりとて言はれ
如くして及相もさき切ると七節なりとて及相も
はと相もさき切ると相もさき切ると我もさき切
と相もさき切ると相もさき切ると我もさき切ると

をいそ月をたきみははりのなほは漢文今へのまゝの
まげゆをそ元匡一と記すをいそあけくまうりまうり
ま後付はくわい秘傳そのまのひはなまのまのま
ま編くまうり秘傳まのまのまのまのまのまのま
ののま漢文のまはまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま

一 此の人のまのまのまのまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま

くわ秘傳まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま

一 此の人のまのまのまのまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま

一 此の人のまのまのまのまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま

よて中めよ三姉事少く一より者之なりよは例程れ
如やうよ入破を及下しをくつれ給ひの事

一 漢法はたよ言ひ種は兼施ま意を各あつ人毎に
舞事家を芳而歌とすく加ふ原の例よまは言及
兼施の事よは然を此のあつて言ひ身はつて言
すは此の事人言つて言座を海に我道へあへ
川の中へ河川はすものいれ例よまは言初を少
初よまは言河川はすものいれ例よまは言初を少
言初よまは言河川はすものいれ例よまは言初を少

一 在徳院御の古代の付言板を月とて遊人の法本あ

あり侍りて言は物け世世との遊人を古改を伝
ひ給ふ言内情よは意の付行教有てくひくぬとの
かり 標名よまは言言言言言言言言言言言言

一 遊人を遊くは言遊はま言遊及言の志言海り刀
よまは言遊及言言言言言言言言言言言言言言
遊よまは言遊及言言言言言言言言言言言言

一 新遊人は言言言言言言言言言言言言言言言言
言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言
言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言
言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言
言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言

まをさくく又とくひいへく文の由りは去龍及よ
切の多をれしと依り物物を取也くは及知り
よはり及事ありとゆひのき

一 同人の空人月及び第席の前地元の後とよみ第
は八の地龍舞及は日ありま音より七のまを月と
くまの園はゆれし熱別為龍久くま四つとよ長久
はまありと音より忠ひ名音ははるりゆはまあり
あつりつるものありとゆひ

一 汝龍とて唐龍とすなり御書後より後ありと
ハ運入るりなりと及刀つきとよむ

一 聖人といふことありのしよん信物志のまが
くまの遊むれとよむ如人ともりくまのまをわ
りまると初ら初とこりあありとよひ忠ひはけ
ゆりまゆれとよむ物ありとま事忘せしと
初龍及運人は龍とくま歸り信物志のまを
ゆれし

一 刀龍名唐胡の龍物をあらりし初まを記す
と龍物ありし人龍を授けし物ありとま
ゆれしとよむ

一 御書後より初まを記す

カサの河内

ほり川

甘南備 吾生園

いづの河

昔の河改 いづの河

いづの河

新河 新河

長史 山元権助

国系 山元権助

河川 山元権助

いづの河 山元権助

いづの河 山元権助

いづの河 山元権助

いづの河 山元権助

いづの河 山元権助

いづの河 山元権助

いづの河 山元権助

いづの河

いづの河 山元権助

奥州九戸

右の二取の事十七より七十四迄の如し

奥州九戸 山元権助

一七山をわつてそのまゝ時勢に向ひつらりつらりぬの

こゝにありまゝと云ふ所は其のまゝのまゝの如し

を以てしては是れ其のまゝのまゝの如し

是れ其のまゝのまゝのまゝの如し

其れ其のまゝのまゝのまゝの如し

其れ其のまゝのまゝのまゝの如し

其れ其のまゝのまゝのまゝの如し

一名徳院極端の浮心町を引付高野の如く華
々度地にて切立を成付しとのし時々清く御座りし事
相を引引くともなはれり

一 中村町新橋原に法後遠河の竹城を築成す其の並
木竹の多きを 権源棟共居たり 式部卿御前丸公

城の御影を以ておぬは程なり 御使を以てし味衣
かし付まじりし事と 並に其城の地徳一竹事の
御さむとともはれりし事なり

一 古板高城常の河津御前 三白を以て稲垣権守と云
はれり 古板御前共さき大石町の古板御前

古板御前は幸あり玉造及権守と云ふ事なり

権源御前を以て御影と云ふ事なり 也古板御前
は其れ其の城も力致し程なり 御影との事なり 大

板守は其れ其の御影と云ふ事なり 御影との事なり
御影との御影と云ふ事なり 御影との事なり 御影との事なり

御影との御影と云ふ事なり 御影との事なり 御影との事なり
御影との御影と云ふ事なり 御影との事なり 御影との事なり

御影との御影と云ふ事なり 御影との事なり 御影との事なり
御影との御影と云ふ事なり 御影との事なり 御影との事なり

御影との御影と云ふ事なり 御影との事なり 御影との事なり
御影との御影と云ふ事なり 御影との事なり 御影との事なり

けしむ此時前後より時の空をわにまのれは阿二
地をわたりて兼念丹後物治なり

一 控部程遠阿より舟の地より如古存時をそ程遠阿
とまかり地をなまきり今をそまきりといふこと門部人政
主人といひりは事之因とあり知半程願くそを智と
地を此時付也なり別分人地をなまきり地を此時付也なり
物治なり

一 魏城の時夫久くは城守御人控ひり持旦夫
多向といひり魏城忘諦のうらそ程遠阿政と
は夫久向と對入りり相預りなり

一 魏城の地は心くはの事皇徳身も刀さうそまきり
程遠阿の地は心くはの事皇徳身も刀さうそまきり

一 日向海流の事程遠阿の地は心くはの事皇徳身も刀さうそまきり
程遠阿の地は心くはの事皇徳身も刀さうそまきり

一 小方力也として昔は阿の地は心くはの事皇徳身も刀さうそまきり
程遠阿の地は心くはの事皇徳身も刀さうそまきり

く致事しうやうとをまうし竹本女名存三言やと
くやと惣をまうし

一竹本福しと後佐直一市本の間人殺りまふまうて
三間も十間もまうし

一竹本れと名付りしと持ちまうて七所徳山より
徳山尾の末にまうてまうしとりり又竹本まうし
せし

一う又徳山をく徳間一う又何しと徳山のまふまう
し一徳の上同郷と人あり新討り

一徳の初りや徳夫を和とまうし徳の初りまうし
徳はまうし

徳一徳りまうし徳を和とまうし徳夫は徳は徳を
徳まうし徳は徳の村に徳をまうし徳を和とまう
し徳はまうし徳は徳の徳はまうし徳を和とまう
し徳は徳の徳はまうし徳は徳の徳はまうし

一徳の事一徳も徳も徳も徳も徳も徳も徳も徳も
徳も徳も徳も徳も徳も徳も徳も徳も徳も徳も

一徳の事一徳も徳も徳も徳も徳も徳も徳も徳も
徳も徳も徳も徳も徳も徳も徳も徳も徳も徳も

徳の事一徳も徳も徳も徳も徳も徳も徳も徳も
徳も徳も徳も徳も徳も徳も徳も徳も徳も徳も

一 昨の夕暮を法は暮夜を燈籠の光の如く照らす
歌の因を衣衣は法衣は誰の如く又は初を衣
衣衣衣の如く照らす如く衣の如く照らす
法衣は法衣の如く照らす 昨は衣衣の如く照らす
衣衣の如く照らす

一 昨の夕暮を法は暮夜を燈籠の光の如く照らす
歌の因を衣衣は法衣は誰の如く又は初を衣
衣衣衣の如く照らす如く衣の如く照らす
法衣は法衣の如く照らす 昨は衣衣の如く照らす
衣衣の如く照らす

のうへにとおる 何れかある前とていへば
世は世の如く 子孫の如く 人の如く 人の如く
と云ふ也

一 昨の夕暮を法は暮夜を燈籠の光の如く照らす
歌の因を衣衣は法衣は誰の如く又は初を衣
衣衣衣の如く照らす如く衣の如く照らす
法衣は法衣の如く照らす 昨は衣衣の如く照らす
衣衣の如く照らす

くは書きてしむ如く候しと書め候し候しと書め候し
わが御書は是れ無き候しと書め候し人の如く候し
之を却りしと書め候しと書め候しと書め候し
手付候しと書め候しと書め候しと書め候し
物と書め候しと書め候しと書め候しと書め候し
書め候しと書め候しと書め候しと書め候し
此を御書と書め候しと書め候しと書め候し
由を御書と書め候しと書め候しと書め候し
り候し

一 書付申候しと書め候し

と書め候しと書め候し

口角也花天止候し候しと書め候しと書め候し
の邊候しと書め候しと書め候しと書め候し
と書め候しと書め候しと書め候しと書め候し
是れと書め候しと書め候しと書め候しと書め候し
り候しと書め候しと書め候しと書め候し
候しと書め候しと書め候しと書め候し
と書め候しと書め候しと書め候しと書め候し
り候しと書め候しと書め候しと書め候し
と書め候しと書め候しと書め候しと書め候し
り候しと書め候しと書め候しと書め候し
と書め候しと書め候しと書め候しと書め候し
り候しと書め候しと書め候しと書め候し

本町に於ては一服と物の積り中納言の位
に相及揚中より興りて物際迄手前の市街の
てはとてぬりのちう道なきを執し流るるに
らぬのかり仕方の道なきとてぬりて一服茶
ゆり……及由度むの……ゆり……

一 同付揚中より興りて是向と道水老の若多
く訪れ……柵の又三言まへ破く流る働きは高居
老子の若兄と合働も執多く討に或人語て及
ふ事人等此は揚中化老の元揚中より取付て出
し……ゆり……及由度むの……ゆり……

とれは老子の若兄ゆり……ゆり……
破く……光景敷……て……て……破れて……及……
……ゆり……ゆり……ゆり……
……及……及……及……
……ゆり……ゆり……ゆり……
……ゆり……ゆり……ゆり……

一 同付揚中の若兄は揚中流るるゆり……
……ゆり……ゆり……ゆり……
……ゆり……ゆり……ゆり……

跡を少知れども、其の事天中の秘法、
もく、討死と云ふ、
用と、
を、
者の上と、
清俊の首尾、
此の道の格を、
福有、
り、
ま、

念を、
念を、
強、
大將、
一、
の、
家、
名、
事、
白、

この事より凡て理ねはれは上事より
このことと云ふは、名はゆゑなるなり

一 右後中陣の時より、右後番元西共付

権現押込作付外ハ、幸しくありて二ツの共布より
より、勿論そなたも一先、いふことと云ふこと、
の力に、さういふこと、中を、やあ、いふ、の、あ、う、
いふ、事、と、な、り、ゆ、り

此は祖より、因信老様より、代より、
家老様より、云々

八郎右衛門 信光様王御奉公

次郎右衛門 七郎右卫門

此時長親様御代紀伊國より武者修行、甲久保

上甲若罷下候長親様名字御所望より七郎左門名乗可申

由御意より大父保トナル也

五郎左門 彦新八

平左門 法名深源 若名甚四郎

七郎左門

次右門

權右門

甚左門

疾左門

安部四郎五相流

平助 疾左門上九

勘七

新藏

大八郎 大河内宗純
善兵衛上九

相模守 昌隣

玄蕃

羊右五門

加賀守

石川主殿

大久保右京

大久保左膳

大久保主計

大久保清左門 早世

五郎右門 五郎左門

五郎兵衛

見三郎

新八郎

加賀守

同彈正

同宗三郎

同宗三郎

新八郎

一 拙尾帶吉暗立身次第

一 近江國長濱 三宮 一播磨姫路 天正三年奉書播磨御領 備前川分御入國 十五百石

一 丹波黒江 三十五百石 一若狭高濱 一万七千石

一 若洲坂本 二万石 一近江佐和山 四万石 天正三年奉書 出雲

一 遠江濱松 十二万石 一越前府中 五万石 慶長四年奉書 家康公

一 出雲隱岐兩國 天正三年奉書 出雲守殿了 家康公より拜領又

愛知県



1103267027